

前回は子どもの発達について、年齢ごとに特徴的な部分について紹介しました。3回シリーズの第2回の今回は、その中でも“ことばの発達”についてお伝えします。 (臨床心理士 田所)



1.ことばの発達

ことばの発達には、大きな個人差があります。それを踏まえたうえで、一般的にどのような過程を経て、ことばが出てくるかには、次のような流れがあります。

発達の様子 段階	ことばの発達	具体例
前言語期	ことばを身につけるための準備。人、音、物への興味が育っていく	<ul style="list-style-type: none"> ・声をかけると笑い返す ・家族に向かって腕を伸ばしたり、興味あるものを指さしする
単語獲得期	ことばの存在に気付き、意味のある単語が少しずつ増えていく。	<ul style="list-style-type: none"> ・車をみて「ブーブー」、犬を見て「ワンワン」という。 ・りんごを見て「ご」と指差す ・ゴミを渡して「ポイしてきて」というとゴミ箱に捨てに行く
幼児期前期 (2～3歳)	ことばの数が増え、2語文、3語文が出てくる。	<ul style="list-style-type: none"> ・「ワンワン いた」「パパ いた」(2語文) ・「あかい りんご たべる」「ママ あっち いった」(3語文)
幼児期後期 (3歳～)	目の前にないものや出来事を理解しことばのやりとりがスムーズになっていく。	<ul style="list-style-type: none"> ・「お母さん、あっちでこういうことしていたのよ」「今日公園で遊んで楽しかったね」などの会話ができるようになる。 ・「質問に答えられるようになる」
学童期	文字の読み書きのスキルを獲得し、表現力・会話力が伸びていく	<ul style="list-style-type: none"> ・りんごを見て「りんご」と書けたり、文字を見て理解できる ・相手の意図やその場の状況に合わせて、様々な表現を使えるようになる。

ことばが出てくる仕組みは、よく、コップに水が溜まりあふれ出す様子に例えられます。「ことばとして外には現れていないけれどわかっていることば」がコップいっぱいになると、「話しことば」としてあふれ出てきます。特に単語獲得期、幼児期前期には、「ことばがなかなか出てこない」「単語が増えない」ということに目が行きがちですが、コップの形や、ことばがたまるスピードには、それぞれの子どもの個性があります。

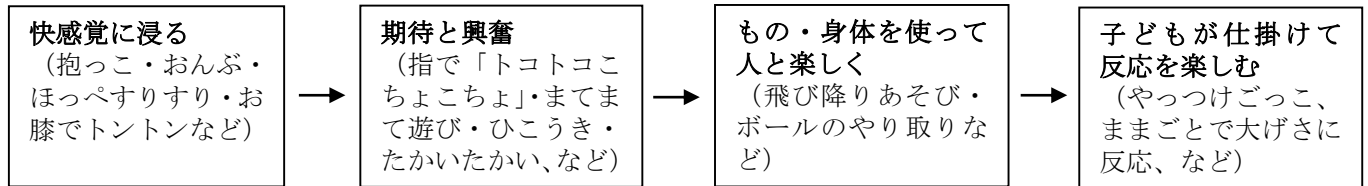
【ことばの発達が遅いようだと感じたら…】

背景にはいろいろな要因が考えられますが、まずは耳の聞こえを確認することが大切です。そして、子どもがしゃべることばの多い、少ないだけにとらわれず、運動発達やモノを使ってどのように遊ぶか、人との遊び方など、全体的な発達の様子を検討します。



2. ことばの発達をうながすために

子どもは自分の周りの人が大好きになるとその人をじっと見てその人の気持ちやすることを理解し、やがて自分も真似をしてことばを使い始めます。子どもひとりひとりの発達は様々ですが、このことは共通の道筋のように思います。ことばの基盤としての〈人として安心・心地よい・楽しい気持ち〉を育むための遊びのレパートリーとしては、



という流れでだんだん人と楽しく遊べるようになっていくことが多いようです。

どんな場合でも大切なポイントは、おとなが子どもの反応（好み）を敏感に感じ取り、心地よさや楽しさや共有できる感性を持ち、根気強く付き合い、繰り返し働きかけ続けることによって、子どもの中の好きなことのイメージがはっきりしてくることで。繰り返すことが、子どもの身体のなかに目覚めた感覚イメージを定着させ、自らの要求に敏感になり、それを実現してくれる人を強く意識させる効果を持っています。

遊び方のコツとしては、

- 狙いは“人がしてあげて喜ぶこと”（テレビやビデオではなく、人の身体と身体で遊ぶ）
- 子どもがキャッキヤと喜ぶことならなんでもOK（他愛ないふざけっこ、あやしかけ）
- 繰り返し何回も（子どもの反応がまずまずなら、できるだけ繰り返す）
- 頑張りすぎないこと（少しでもいいから毎日続ける）
- 時間を作る、家族で助け合う
などです。



ことばを育てるのは子ども自身です。大切なのは、人との楽しい遊びを通して、人の存在に気づき、人に興味を持ち、人に頼ることを覚え、人に伝え、人と共感したい子どもになるよう、援助していくことです。親も子も楽しみながらお互いをますます好きになり、ことばの土台を作って行けるよう願っています。